

多文化共生をめざすことばの教育とは何か
—多文化共生教育における多言語カルタの授業実践から—
 道下 あかね (東大阪市立枚岡西小学校)

1. 実践の背景

A 義務教育学校では、多くの学年で外国にルーツのある児童生徒が在籍している。実践を行った当時の 6 学年では、中国、韓国・朝鮮、フィリピン、ベトナム、ネパール、フランス、とルーツが多様であった。学校全体であれば、それ以上のルーツの在籍となり、非常に多様であることが見て取れる。そして、外国にルーツのある児童生徒の中には、抽出して日本語指導が必要な子どもも多く在籍しているが、日本ルーツの児童はどのような学習をしているのかは知らない。また、学校全体として、多文化共生教育は推進されているが、多言語に関する授業はあまり見られないのが特徴である。だからこそ、今多言語に関する多文化共生教育が必須であり、学校現場において多文化共生を広めていくための方法を模索する必要がある。

2. 実践の内容

2.1 多言語カルタとは

多言語カルタとは、所属する学校の子どもたちにとって、ルーツのある国・地域につながる言語で作られたカルタであり、それが 3 つ以上の言語で構成されているものである。

2.2 実践の対象・実施時期

義務教育学校 6 年 3 組 (3 学級のうちの 1 学級) 33 名が対象である。義務教育学校であるため、授業時間は 50 分である。この学級にはネパールルーツの児童 1 名が在籍している。

2.3 単元名・単元目標

単元名 「オリジナル多言語カルタづくり～多文化共生とは何かを考える」

単元目標 多様な国・地域につながる言語に親しむ活動を通して、多文化共生社会を実現するためには何が必要なのかを考えようとしている。

3. 本実践について

第 1 時の目標 多くの国・地域の言語に親しみ、オリジナル多言語カルタを作成できる。

第 2 時の目標 自分たちで作成したオリジナル多言語カルタで遊ぶことを通して、自分の周りにいる人々と共に生活するにはどうすればよいかを考えることができる。

表 1 本時の展開と指導上の留意点

主な学習活動	
第 1 時	1. めあての確認 2. 世界のイメージ (青い、たくさんの国、たくさんの人、等) 3. 学校に在籍するルーツのある児童について 4. 多言語のあいさつ (8 言語) 5. オリジナル多言語カルタ作り 6. 授業の振り返り (Forms 使用)
第 2 時	1. めあて 2. 発音練習: 多言語カルタ (野菜) 3. 多言語カルタの遊び方説明 「〇〇語—〇〇語—日本語」の順で言う。

	4. 多言語カルタで遊ぶ 5. 前時と本時の授業を経た振り返り (Forms 使用)
--	---

図 1 多言語カルタ (表面)

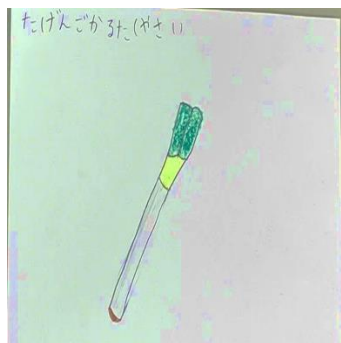


図 2 多言語カルタ (裏面)

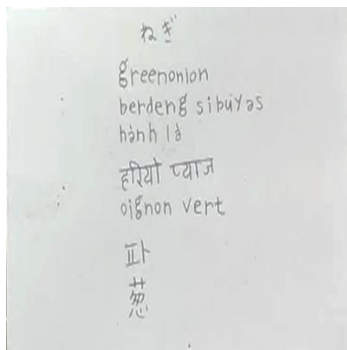
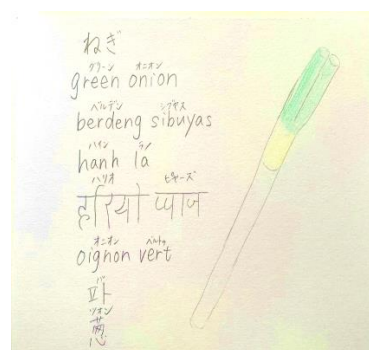


図 3 多言語カルタの読み札



4. 実践結果と考察

4.1 子どもの様子

ネパールルーツ児童 A は、ネパール語の読み書きは難しいのだが、多言語カルタ作成の際、積極的にネパール語の語彙を書くことができていた。日本生まれ日本ルーツの児童がカルタを読む際に、自らネパール語を選択しカルタを読んだ。それをネパールルーツ児童 A が取り、とても嬉しそうな表情をしていた。

4.2 教師の役割

最初の例では、普通の授業で学ぶ英語を挙げて出題した。次には外国にルーツのある児童がその場で活躍できるように、出身の国にルーツのある言葉を読んでもらうようにした。そして、その後は日本ルーツの児童は日本以外の国の言語を読んでもらうようにした。その際、こちらから何語か提示するのではなく、「何語でもいいから読み手をやりたい人」と発言したので、ネパール語のカルタを選択して読むことにつながった。

4.3 考察

指名された日本ルーツの児童は、言語を教師が指定したわけではないが、自らネパール語を選んで出題した。指名された日本ルーツの児童は「(ネパールルーツの児童が)活躍の様子を見たい」と考えたのだろうと推測できる。普段はネパールルーツの子どもも活躍したいが、日本語がわからないというだけで誰かの支援を受けなければならない。このような状況を理解した上で、ネパール語であれば、ネパールルーツの児童が自信をもって参加できることに気づいたため、その児童はネパール語をあえて選んだ。この児童は普段から、周りをよく見ている。話し合い活動でもネパールルーツ児童が発話するのをじっくり待っていたり、サポートしたりしている姿がよく見られたため、本時でも自然に行動として現れたのだと考察する。

5. 結論

学校とは、多様な児童生徒が互いの個性を受け入れ、共に生きていく場である。そして、多文化共生とは一人では実現できるものではない。多文化共生をめざすことばの教育として、今回の多言語カルタの実践を基盤としながら、今後に向けて何が必要なのか考え続けていきたい。